

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 9 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520046

研究課題名(和文) 生命・技術・文化を包括する現代的な自然哲学の構築

研究課題名(英文) The construction of a new philosophy of Nature which combines Life, Technique and Culture

研究代表者

米虫 正巳 (KOMEMUSHI, Masami)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：10283706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：フランス哲学、特にフランス現象学と科学認識論に立脚しながら、生命と技術と文化という、場合によっては相対立すると同時に、21世紀の今日において必然的に交錯することにもなるこれら三者を包括することのできる新たな「自然」の概念と、それに基づく現代的な自然哲学の構築を目指した。特にアンリ、シモンドン、ドゥルーズらの哲学における自然概念の再検討を通して、自然と人為=文化、生命と技術、文化と技術という対立に先立つ非全体的な場所としての自然という概念に到達する必要性と共に、それを様々な学問領域との対話の中でさらに練り上げつつ、この概念に基づく「自然哲学」の可能性を展開すべきことが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：Based on the French philosophy, in particular on the French phenomenology and the French epistemology in twenty's century, we have tried to create a new concept of Nature which combines Life, Technique and Culture which conflict each other under certain circumstances and intersect inevitably in this century, and to construct a new Philosophy of Nature founded on this concept. Through the reexaminations of the Nature in the philosophies of Michel Henry, Gilbert Simondon and Gilles Deleuze, it became clear that we must arrive at the concept of not-totalized Nature-Place which precedes the alternatives nature-culture, life-technique, culture-technique and that more elaborating this concept in the dialogues with various disciplines, we must develop the possibility of the new Philosophy of Nature.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学，哲学・倫理学

キーワード：自然哲学 自然 生命 技術 文化 アンリ シモンドン ドゥルーズ

1. 研究開始当初の背景

平成 22 年度以前の段階では、フランスにおける現象学と科学認識論の関係をめぐって数年間研究を続けてきたが、この研究を進める中で、特に中心的なものとして位置づけていた「生命」の概念を、より根本的な観点から、またそれと直接的あるいは間接的に関わる他の様々な概念との関係から考察する必要性が自覚された。そこで平成 23 年度以降は、この「生命」の概念を、「技術」や「文化」という概念との関係から考察すると共に、「自然」という観点からそれらを包括的に捉えるという課題に取り組むことになった。

2. 研究の目的

(1) フランス現象学と科学認識論の交差する地点で「生命」を考察対象としつつ、21 世紀の現在において、必然的にこの「生命」が関わらざるを得ない「技術」と「文化」をどのように捉えるべきなのか、またそのことから逆に「生命」というものがどのように捉え返されることになるのか、この問題に答えることが第一の目的である。

(2) しかしこの第一の問題に答えることは、同時に次のような第二の問題に答えなければならないということの意味する。すなわち今日において、それら「生命」・「技術」・「文化」が相互に浸透し合い、不可分な形で存在しているならば、それらの存在がそこで同時に可能となっているような一つの場所が存在しなければならない。ではそれはいかなるものであるのか。本研究では、「生命」・「技術」・「文化」の三つを同時に横断しつつ根底で支える「自然」としてその場所を解明し、その明確な概念を形成することを第二の目的とした。

3. 研究の方法

(1) 平成 22 年度以前の研究成果も活用すべく、本研究の立脚点を、20 世紀以降のフランス哲学、とりわけフランス現象学と科学認識論という二つの系譜と、それらの交差する地点に置くことにした。つまり従来からの二つの系譜に即したフランス哲学研究を、本研究課題に即して、より深化・進展させるという方法を採用ことにした。

(2) 本研究に関わる諸概念、すなわち「生命」、「技術」、「文化」、そして「自然」という概念について、これまでのフランス現象学及び科学認識論においてどのような考察がなされてきたのか、また現時点での達成とはいかなるものであり、それと同時にいかなる限界がそこに含まれているのかを明らかにするために、当該の諸概念に関わる現在までの諸研究を可能な限り網羅的に検討することによって本研究を遂行した。そのため、フランスにおける調査を数度行ない、様々な資料を検討すると共に、何人かのフランスの研究者

たちとの研究交流を通じて、本研究の円滑で効率的な進展を図った。

4. 研究成果

(1) フランス現象学に立脚した研究としては、第一に、ミシェル・アンリとエマニュエル・レヴィナスという、20 世紀のフランス現象学を代表する二人の現象学者を主要な研究対象として、特に「生命」という観点から彼らの哲学に考察を加えることにした。

彼らの哲学は、前者が内在の哲学、後者が超越の哲学と、一見したところ対照的であるように見える。前者は超越の根拠としての根底的な内在を、後者は内在に還元されない絶対的な超越を、それぞれ自らの哲学にとって根本的なものと看做しているからである。しかし「生命」という観点に立脚すれば、両者の対立は或る意味では見かけにすぎない。そこでまずは「生命」という視点から、両者の関係を解きほぐすことが重要となる。

一方でアンリは、彼が絶対的で唯一の生命と呼ぶものが、個体的な個々の生命を創造する必然性が存在しないにもかかわらず、なぜそのようなことを行なうのか説明できない。さらにアンリは内在としての生命が何らかの要素によって脅かされることを認めることができない。したがって、レヴィナスの現象学と比較した場合、アンリの生命の概念には二つの欠落が存在する。すなわち、生命の内的な脆弱さと、生を襲う真の新しさを説明することができないという不可能性である。

他方でレヴィナスの場合、存在とは異なる存在とは別の仕方によって存在を基礎づけようとする以上、存在とは別の仕方から存在を完全に排除することはできない。したがって倫理学が存在論に先行するという訳ではなく、超越として位置づけられるその生命の概念を、アンリ的な内在としての生の存在論の観点から批判的に再考することは常に可能である。

このように考えるならば、両者の哲学における生命の概念をそのまま受け入れるのではなく、むしろ両者の間に立って、各々に必要な変更を加えつつ、生命を単なる内在でも超越でもないようなものとして規定し直す必要があるということが結論として導かれることになる。

(2) さらにアンリの生命の現象学を、フッサールやハイデガーの現象学との関係から見直す必要がある。というのも、これら両者を批判しつつ、アンリの現象学は構築されているからである。

そこでアンリとフッサール、ハイデガーとの関係を再考するべきであるが、その際、フッサール的な観点からアンリに対してなされた批判と、ハイデガー的な観点からアンリに対してなされた批判がいかなるものであるのかを検討しない限り、実りある議論はで

きない。そこでフッサールとハイデガーを継承する現象学者たちのアンリ現象学に対する批判を取り上げた結果、議論の賭け金となるものは、アンリが「世界」と呼ぶもの以前に、その外部で生じるものの存在を認めることができるか否かということであることが判明する。

ところでアンリにとって、世界とは超越に属する空間であり場所であるが、アンリの現象学からはすべての空間や場所が完全に排除されている訳ではない。というのも、彼は「世界以前の場所」、「生命の滞在所」、「起源の場所」というものの存在を認めているからである。つまり内在としての生命に固有の根源的な場所が前提となってアンリの議論は進められている。そして、ここでフッサールやハイデガーとの関係に立ち戻るならば、まさに両者こそ、アンリ以前に空間に先立つ場所としての「先空間的場所」あるいは「根源的場所性」を問題にしていた哲学者であったことは明記すべきである。つまりアンリとフッサール、ハイデガーとの真の対話が為されるべきだとすれば、それはこの「場所」に立脚することに寄ってであるし、また彼らの哲学の一致と不一致を明らかにしようとするならば、それはこの「場所」をめぐる以外にはない。いずれにせよ、技術にも文化にも先立ち、また同時にそれらを可能にするこの「場所」こそがまさに、アンリに即して「自然」と呼ぶことのできるものとして位置づけられることになる。

(3) フランス科学認識論に立脚した研究としては、主にジルベール・シモンドンの哲学を研究対象として取り上げ、特にその哲学の根幹にある個体化論を一つの自然哲学として解釈し、そこから普通の意味での自然には還元されない「自然」概念を取り出すことが目論まれた。

シモンドンは自らの個体化論を第一哲学として規定しつつ、そのために必要な条件を二つ提示する。すなわち個体から出発して個体化を捉えようとするのではなく、逆に個体化から出発して個体を捉えなければならないということ、そして個体以前の存在、すなわち前個体的存在へと遡行しなければならないということの二つである。したがって最終的には前個体的存在から出発して個体化というものを考えなければならないということである。

しかしながらそこには悪循環があるのではないだろうか。というのも、シモンドンによるならば、前個体的存在が把握され得るのは、あくまで事後的な仕方、また間接的な仕方によってでしかないからである。つまりそうであれば、前個体的存在を捉えるためにはまず個体から出発しなければならないということになるが、これは明白に、個体化から出発して個体を捉え、個体化を考えるために前個体的存在から出発するという当初の

要請と矛盾をきたしてしまう。

しかしこうした困難にも関わらず、第一哲学の可能性というシモンドンの着想を肯定的に捉えることは可能である。それは生命的次元での個体化の持つ特異性に注目することによってであり、この特異性は、生命に本質的とシモンドンが看做す情感性と情動性が前個体的存在の純粋な現前を生命自身に可能にするという点に存している。そして生命が立脚しているこの前個体的存在こそ、シモンドンが「自然」と命名するものでもある。

(4) では、アンリとシモンドンから導き出された「自然」というものを、どのようにしてより具体的に、またより厳密に概念化すればいいのだろうか。これは、前者の現象学と後者の科学認識論を媒介することができるかどうかという問いでもある。そこで現象学と科学認識論の媒介者として、ジル・ドゥルーズの哲学を取り上げて考察し、その哲学全体の中で「自然」概念がどのように構築されているのかを探究することで、生命・技術・文化を包括することのできる「自然」概念とそれに立脚した「自然哲学」の構築を試みるという本研究課題が果たされることになる。

まずドゥルーズの自然概念を正確に理解するためにも、そもそもその哲学がどのように形成され、またどのように進展していったのかを確認しておく必要がある。そこでドゥルーズ哲学の出発点となったヒュームの哲学に着目し、前者が後者との関係でどのように生み出され、またその関係の変化と共に、前者がどのように変化していったかを、ドゥルーズのヒューム解釈の同一性と差異を見極めることで、明らかにすることが課題となった。

その結果判明したことは二つである。一つは、理性に対する情念の優位というヒュームの根本的な着想をドゥルーズは端的に受容しつつも、複数の情念を関係づける「情況」という概念によってそれを基礎づけようとしていること、をヒュームから取り出そうとしていることである。もう一つは、ヒュームの経験論をどのようなものとして理解するかに関してのドゥルーズの見解は初期から晩年まで完全に一貫しており、特に関係づけられる項に対する関係の外在性、そしてそうした関係を与えるものの優位性に経験論の本質を見ているということである。つまりこれら二点からは、複数の情念を関係づける情況が関係を与えるものとして位置づけられ、さらにそれが後のニーチェ読解における「力への意志」についての解釈にもそのまま活用されているということを見て取ることができる。

これらの点が、1960年代以降のドゥルーズ哲学の進展の中で重要な概念として浮上してくる「自然」と無関係ではないことは言うまでもない。というのも、複数の要素に対して外在的なものとして、それらを関係づける

という性格は、通常の意味での自然でも、一般的にはそれに対立するものとされる人為でもなく、自然と人為の両者を関係づけつつ、それらのいずれでもないものとして位置づけられるドゥルーズの「自然」概念に対応しているからである。しかもこの「自然」は「一なるもの」でも「全体」でもなく、すべての要素を包括しつつ、決して全体化されることのない場所という矛盾を含んだ表現でしか言い表すことのできない「領域」のことであり、自然と人為=文化の対立にも、生命や自然と技術の対立にも、そして文化と技術の対立にも先立つようなこうした非全体的場所としての「自然」概念の彫琢こそ、ドゥルーズ哲学に一貫したもっとも根底的な目的であったと理解しなければならないということが判明した。

しかしながらドゥルーズの言う自然概念はあくまで未完のものであって、そこには「自然」の「一なるもの」への還元を含むような或る曖昧さが残っていることを指摘しなければならない。それゆえ、いかなる意味でも「一なるもの」に還元されることのない非全体的場所としての「自然」概念を、さらに様々な学問領域との対話の中で練り上げつつ、そうした概念に基づく「自然哲学」を構築し、その可能性を展開することが、さらなる課題として残されたことになる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

1 米虫正巳、情念の情況 ヒューム解釈から見たドゥルーズ哲学の発生と進展(3)、『哲学研究年報』第47輯、査読無、2014年、1~34頁

2 米虫正巳、生という場所 生の現象学と歴史的現象学、『ミシェル・アンリ研究』第3号、日本ミシェル・アンリ哲学会、査読無、2013年、49~69頁

3 米虫正巳、何をもって経験論と認めるか ヒューム解釈から見たドゥルーズ哲学の発生と進展(2)、『哲学研究年報』第46輯、査読無、2013年、1~39頁

4 米虫正巳、非全体的な機械圏という自然 ドゥルーズと「自然」の概念、『現代思想』第39巻第16号、査読無、青土社、2011年、218~234頁

5 米虫正巳、個体化に立ち会うこと シモン・ドントと「第一哲学」の(不)可能性について、『フランス哲学・思想研究』第16号、日仏哲学会、査読無、2011年、3~15頁

6 米虫正巳、内在と超越の間の生 アンリとレヴィナス、『ミシェル・アンリ研究』第1号、日本ミシェル・アンリ哲学会、査読無、2011年、77~95頁

〔学会発表〕(計1件)

1 米虫正巳、生の場所 生の現象学と歴史的現象学、日本現象学会2012年研究大会ワークショップ「ミシェル・アンリと生の現象学の可能性」、於東北大学、2012年11月18日

〔図書〕(計2件)

1 米虫正巳、他、慶應義塾大学出版会、『エピステモロジー 20世紀のフランス科学思想史』、2013年、243~322頁

2 米虫正巳、他、河出書房新社、『歴史としての3・11』、2012年、151~160頁

6. 研究組織

(1)研究代表者

米虫 正巳 (KOMEMUSHI, Masami)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：10283706